

北軽井沢は3月下旬から4月上旬にかけて雪が降り、まだ季節は「冬」のままです。そんな中でも、森の切株に一塊のキノコを発見しました。

「キノコ」とは「真菌類の目に見える大きさを持った子実体（胞子の拡散器官）の通称」です。一般に、秋の産物と思われがちです。それは間違いではなく、圧倒的に秋に発生するキノコが多いのは間違いありません。しかし春のキノコもあります。「アミガサタケ（網笠茸）」「フミヅキタケ（文月茸）」「ウラムラサキ（裏紫）」などです。初夏にもハツタケ（初茸）の仲間がこぞって発生します。中には真冬から早春に発生する「超変わり者キノコ」も存在します。その代表が「エノキタケ」です。

エノキタケ（榎茸）といえば、スーパーで売っている白くてひょろ長いキノコを想像すると思います。あれも確かにエノキタケ（の遺伝子を持った）の子実体ですが、暗所でおがくず栽培したもので、いわば「エノキタケのもやし」です。天然のエノキタケは、茶色の大きな傘を持ったキノコで、スーパーのものとはまったく異なる姿です。しかも真冬から早春に発生するのですから驚きです。別名「ユキノシタ」と呼ばれるのも頷けます。

北軽井沢の切株で見つけたこのエノキタケは、傘の一部が凍っていました。エノキの切株を好みますが、ほかにもブナ科樹木やポプラなど、多くの広葉樹の切株に発生します。このエノキタケは、「シラキ」という樹木の切株に発生していました。

（2025 年 4 月上旬／北軽井沢）

